

# 土居昌弘の大分県議会議員活動報告

## 羽ばたき

平成26年新春  
第11号

### 民主主義の挑戦!! 輝き合う社会を求めて



土居昌弘公式ホームページ  
<http://doi-masahiro.net/>

編集：暮らし考房「もやい」 発行：土居昌弘  
土居昌弘連絡事務所 〒878-0005 竹田市挾田670番地  
TEL 0974-62-4848 FAX 0974-63-0124

不可能の反対語は可能ではない。挑戦だ!

ジャッキー・ロビンソン(黒人初の大リーガー)

#### 時代遅れの選果機

今から3年前。JA竹田事業部トマト部会では、萩にある選果機の老朽化と機能について頭を悩ませていました。導入から10年目を迎える選果機は、ロボット方式という、ほとんど全自動のものが人手は掛からないが、箱詰めしたトマトにどうしてもばらつきができてしまうのが難点。また、機械での選果でトマトが傷んでしまうことも。

時代は変わり、市場はより高品質なトマトとより多様なパッケージを求めています。そこでトマト部会は選果機を手詰め方式に代えて、形と色がそろったトマトを出荷していくことを思案。ただ心配なのは、手詰め方式の選果機を導入すると、人手が今以上に必要となることでした。

#### 一致団結で決断

平成24年度の県の予算では、トマトの選果機新規導入の事業は1基分。しかし、県下にはトマトの産地がいくつもありません。萩の選果機を入れ替えようと思えば、いち早く手を上げなければなりません。ところが、萩町で新しい選果機に対応できるような人手が確保できるかが問題です。

トマト部会内では幾度も議論を積み重ね、人手の足りないロボット方式の選果機を長寿命化していく方がいいのか、新たに人手を探さなければならぬ手

詰め方式を新規に導入した方がいいのか、何度も検討しましたが、なかなか結論が出ません。

そこでトマト部会の執行部が動きました。手詰め方式を新規に導入したいと方針を打ち出し、部会内を説得して回ろうとしたのです。が、その必要はありませんでした。部会のみなさんも執行部の向く方を向いて、いっしょに頑張るつも

## トマト手詰め方式の新選果機導入



パッケージ室で「赤採りトマト」の仕上げ作業

りでいたのです。

#### 地域の可能性

平成25年6月から本格的に稼働している手詰め方式の新選果機の総事業費は約2億7千万円。人の手による選果やパック詰め作業で商品の質は上々。また、施設内には新たに空調設備を備え付け、7～9月の出荷ピーク時も品質を落とさず、作業も効率化できました。今年度は猛暑で生産の方が苦しみました。

たが、なんとか持ち直して出荷も順調。産地側の生産者・JA・行政が一体となった努力を市場も高く評価し、応じて下さいました。

問題となっていた人手の確保ですが、部会のみなさんは土日なしの毎日出荷体制で選果場の仕事を調節し、パート職員の方々も懸命に働きましたが、どうしても足りない状況も。その足りない部分を補うために参入したのが、福祉施設で働く障がい者の方々です。

新たに7か所の福祉施設から障がいのある人たちが作業に。個々の能力に合わせて、トマト拭き・シール貼作業やライン作業、パック詰め作業などに分かれ、選果場の職員といっしょに働きました。就労期間が終わって「工賃が上がった」「働くことに喜びを感じた」「職員が普通に接してくれて、うれしかった」など感想を語り、来年度も働きたいと笑顔がこぼれます。

トマトの選果機導入という挑戦が生んだ様々な成果。原真治トマト部会長は「まとまりが大事。一生涯つくり続けられるトマトの実現に挑戦は続く」と言い切ります。

萩のトマト選果機導入に際してのトマト部会のみなさんの取り組みは、私たちに多くのことを教えてくれています。



箱詰めライン



手で選別中



12月3日 集中豪雨によって幾度も被災する竹田市の脆弱さを県と共有し、災害に強い竹田市を構築していこうと訴えた。

### 大分県議会 平成25年 第4回定例会

## 土居昌弘一般質問

11月26日から12月11日まで開会されました今回の定例会で一般質問に登壇しました。「ぐるっとくじゅう周遊道路」の整備の推進や、障がい児の保育環境の改善などについて、県の現在の取り組み状況を確認のうえ、より豊かな大分県を築いていくために提言。

ここでは玉来ダムと畜産についての問答を紹介します。

### 玉来ダムの

### 一刻も早い完成を



(土居議員質問)

平成25年1月24日に広瀬知事とともに

に、玉来川流域の志土知を訪れた。そこで、ムラサキの里営農組合の女性から「私たちは例年、正月過ぎには直売所に七草を出品していたが、今年は出来ない。田や畑が崩壊し、七草も生えない。私たちの心に大きな穴が開いてしまっている」と辛い現状の言葉を投げかけられた。私たちの暮らしや尊いいのちをも容赦なく奪っていった九州北部豪雨災害。玉来ダムの完成を流域に暮らす人々は待ち望んでいる。豊肥地区の度重なる被災の歴史に終止符を打つためにも、早期の完成を。

### (広瀬知事答弁)

竹田市周辺は複雑な地質。技術的な課題もあるが、稲葉ダムで培った技術と経験をもとに、国や研究機関と綿密な検討を進めている。

また、平成25年3月には地元の玉来ダム対策協議会



平成24年7月12日 豪雨後の文化会館周辺

玉来川の氾濫した濁流は山手地区に



と「ダム建設

に関する基本協定」を調印。ダム建設に向けて弾みがついた。

今後は用地取得の前提となる損失補償基準

について、協議会と早期の合意を図り、用地買収に着手したい。一刻も早く、ダム建設の槌音を響かせることができるよう、全力で取り組んでいく。

### (土居議員質問)

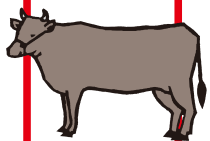
玉来ダムを建設する「竹田ダム建設事務所」の職員体制は、竹田市からの派遣を含めて17名体制。用地交渉するチームは3名1チームのみ。ダム建設工事についても本体設計と周辺工事をいっしょにやっている。

これから地元としっかり協議をしようとしているが、この体制のままいいのか。

### (畔津土木建築部長答弁)

現在、平成26年度の予算を作成中。「竹田ダム建設事務所」の体制についても検討していく。

### これからの肉用牛振興に向けた柱



(土居議員質問)

県内の肉用牛繁殖雌牛の飼養頭数は、平成25年が17,300頭で、この10年で3割減。また、飼育農家も10年間で、ほぼ半減の1,480戸。加えて、その農家のうち、70歳代、80歳代の割合は、約4割。

このような繁殖牛と繁殖農家の減少傾向を県はどう捉え、今後どのような打開策を講じようとしているのか。

### (広瀬知事答弁)

繁殖雌牛の半数は60歳以上の人が飼育しているが、今後はいかにして世代交代を進めていくかが課題。



第74回県共進会で直入の吉野純子さん(写真右) 写真左は夫の慎吾さんが農林水産大臣賞を受賞。また、優秀賞首席の直入の馬場勝信さんと久住の大窪統御さんをはじめ、竹田市の多くの出場者が賞を獲得。今、竹田市の畜産が期待を集めています。

この状況を踏まえ、生産から流通・販売までを見据えた戦略的な計画を策定し、繁殖牛対策として次の3点を柱に取り組んでいく。

- ① 優秀な繁殖雌牛を集約するキャトル・ブリーディング・ステーションの導入などで、牛と匠の技を担い手に継承するシステムを構築する
- ② 農業大学校や企業の経営体との連携により、後継者・新規就農者の確保に努めるとともに、足腰の強い持続力のある経営体を育成する
- ③ コスト低減と省力化を草地の有効活用等で実現する。

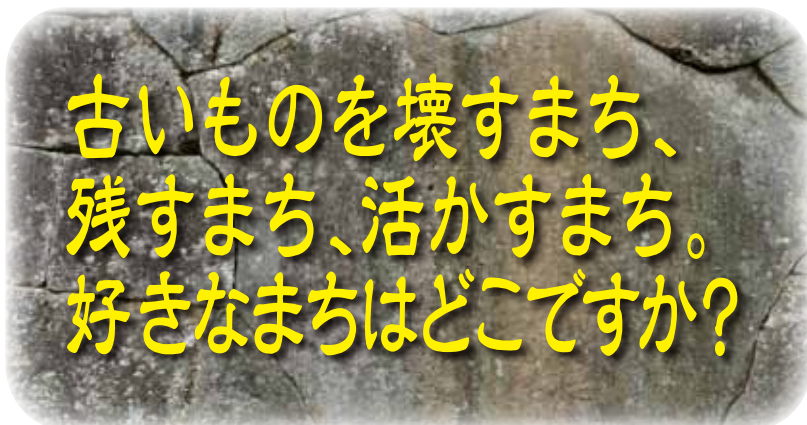
この3つの柱を中心に、繁殖基盤を盤石なものにするための支援を充実させていく。

# 竹田城下町の再生を考える

竹田市は9月1日(20日までの間に「まちづくり市民アンケート」調査を実施。市内在住者から1,000人を無作為に抽出し、回答を42・2%の方からいただきました。市では竹田城下町の将来ビジョンを描く「都市再生まちづくり基本計画」を策定しようとしています。ですが、この調査は基本計画の土台を練り上げるために行われたものです。

その調査結果。なぜ竹田のまちに魅力を感じないのか?という問いには、1位「空き店舗が増えているため」2位「駐車場不足」の回答が著しく多い。では、活かすべき魅力は?の問いには、1位「城下町としての風情」がダントツ。これによると多くの市民は風情が感じられる美しいまちを、空き店舗を活用し、駐車場を整備していくのと同時に、個店の魅力を磨き上げながら求めていくことを望んでいます。

9月24日出雲大社に調査に行きました。大社正面から延びる幅員約12mの道路、神門通りは都市計画で幅員16mにする予定でした。しかし、門前町の街並みを守ろうという住民の反対によって現状の幅員で整備し直し、保存した街並みを活かして、まちの賑わいを再生していました。



さて、竹田の城下町。まちの未来をかたちづくる大事な時です。「芸術文化が薫るまちづくり」「まちなか定住促進」などの意見も。みんなで議論を重ね、様々な意思と考えとをすり合わせながら、その過程のなかから生まれる城下町の将来の姿が、街並みを活かした、歩いて楽しいまちづくりへの確かな一歩となるでしょう。



大社神門通 人と車が空間を共有する歩車共存空間、シェアド・スペース。段差などの歩行者と自動車とを分離する構造をやめ、歩行者と運転者の双方の安全意識を高め、注意を促すという考え方に基づく整備手法です。

## 県立高校の定員を守る

今年度の竹田市の中学校3年生は132人です。現在、竹田高校の定員は1クラス40人で4クラスの160人。三重総合高校久住校の定員は40人。少子化に伴って市内の県立高校の定員が過剰気味になっっている現状があります。

県教育委員会では地域の卒業予定者数や進路希望状況、過去の入試実績などをもとに、高校の定員を決定します。県下の卒業予定者も減少しているなかで、県教委もどこかの学校の定員を減らさなければなりません。当然、竹田高校も、それを検討されるべき学校となったのです。

まず始めに動き始めたのが竹田市PTA連合会。「地元高校の定員を守りましょう」とチラシを作成し、中学校に配布しました。



竹田高校は県下に8校ある進学指導重点校の豊肥地区唯一の学校。4クラスから3クラスに減らされると重点校の体制が取れなくなってしまう恐れも。そうなる

### 竹田高校と三重総合高校久住校

と、地域の拠点校の名を下ろさなければなりません。

これに危機感を持った地元は、首藤勝次市長と吉野英勝教育長、後藤眞二同窓会長、秦博典竹田高校PTA会長、佐藤龍太市P連会長、私の連名で、県教委に竹田高校の定員維持の要望書を提出。地元の熱意と定員確保の取り組み状況を伝えたのです。

そして、9月26日、来年度の県下の定員を県教委が発表。6校の高校がクラスを減らされるなか、竹田高校は現状維持に。1クラス減となった



9月3日「竹田高校の定員維持」など、地元の要望を県教育長に伝えました

杵築高校を10月に訪問して話を伺うと、校長は「一度も定員割れをしたことがないのに」と怒りの心情を吐露されましたが、豊肥地区の現状には理解下さり「今後ともに頑張っていこう」と言われました。

このようにして竹田高校は定員を維持しましたが、次は定員を確保できるかが課題。久住校も今年度定員割れで、募集停止基準(全生徒数が定員の3分の2を3年連続で割ると募集停止)のことも考えなければならなくなりました。

学校の魅力をより高め、この豊かな環境下で研鑽を積めることを積極的に発信していくことが今、求められています。

# 社会的包摂への現在地

昨年の竹田市成人式。会場の久住公民館には、多くの若人たちが晴れやかな衣装を身に着け、顔をほてらせながら談笑する姿が見受けられました。仲の良いかった友達や好きだった人との再会。雪の積もった久住山も、麓の公民館から雪解けしそうなぐらいいました。

しかしながら、今年も残念なことが。それは、式に竹田支援学校の卒業生が一人も参加していないので

す。そもそも、成人式に集う多くの若者たちは、県議会議員の祝辞を聞くために参加しているのではありませぬ。いっしょに育った懐かしい仲間に出会ったために集まっています。



今年の成人式で第6回目になります

竹田市は支援学校の卒業生にも式の案内を出していますが、いつも欠席の返事です。それは、支援学校を卒業した若者たちは成人式に出席しても、この目的を成し遂げることができないからなのです。

保護者の願いで竹田支援学校では、平成21年1月から学校独自で成人式を開催。懐かしい仲間が集まり、新成人としての誓いを一所懸命に発表しています。

# 支援学校との交流

この現状を変えていこうと支援学校と地元の学校では、「交流及び共同学習」事業を行っています。10月には竹田支援学校と竹田高校とで、この事業を実施。障がいのある生徒とない生徒が一緒に活動して、地域の一員としての相互理解を深めようという取り組みです。

通常、この事業の参加生徒数は「障がいのある生徒数」×「障がいのない生徒数」で行われますが、今回はその逆に、障がいのない生徒一人一人が、障がいのある生徒を理解し、認識しやすいように工夫されました。

# すべてを包み込む社会

実際には、知的障がい者が学ぶ竹田支援学校高等部15名の学習に、竹田高校2年生の6名が参加。事業後の竹田高校生の感想は「最初、どう接しているのか、わからなかったが、みんなの笑顔は素敵だし、友だちも沢山できて良かった」「ハンディキャップを持っていても、素晴らしい仕事が行えていて、自分たちが学ぶ点が多くあると思った」などで、障がいのある生徒の頑張っている所や良い面を見て、自分たちと同じ高校生であると感じ、沢山の笑顔を見て、元

気と勇気を得たようです。この取り組みは、南部小学校や南部中学校などでも積極的に行われています。

この取り組みは、南部小学校や南部中学校などでも積極的に行われています。

# みんな地域の子ー副籍制度

この分野での先進的な取り組みの一つは、副籍制度です。「副籍制度」とは、支援学校の子供たちが居住地の小学校の副次的な学籍を持つて、障



埼玉県の支援学校で「副籍制度」の調査

がいのある子供も地域の学校で学習・交流することで、地域社会や仲間とのつながりをつくっていくという制度。お互いが思いやり、この社会をともに暮らしているのだという意識を醸成していくのです。

支援学校の子供は入学式や運動会、文化祭など、年に1〜6回ぐらいは地元小学校に登校。地域の学校には当然、常時その子の机があります。地域の学校の子供たちは「いらっしやい」ではなく、「お帰りなさい」と笑顔で迎えてくれます。「あっち」も「こっち」もない、「みんないっしょ」の世界がありました。東京のある中学校では支援学校の生徒も、みんなといっしょに卒業アルバムに

載りました。埼玉県のある商店街では子供同士が顔を合わせれば、元気な挨拶を掛け合います。

# 障がいのある人も、ない人も

さて、大分県。もちろん、このような取り組みはしていません。その子に合わせた適切な個別教育を施す支援学校が、社会の醸し出す雰囲気でも「遅れた教育」を施すところと偏見を持たれ、一般社会から隔離されてしまっていると言っても過言ではない現状が、まだあります。

「交流及び共同学習」などを通じて、ともに生きていく仲間だという意識は確実に芽生えつつあります。支援学校も普通学校も、ともに地域の学校として交流を深め、それぞれの機能を補完し合いながら、障がいのある子も、ない子も、地域の子供として立派に育んでいく、そういう環境づくりをしていきたい。成人をみんな祝えるように。



11月18日(月) 村木厚子厚生労働事務次官とソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)について議論し、共に支え合い生活していくことが大事だと、思いを同じくしました。